

# コミュニケーション能力の育成に関する指導法の研究

- スキット活動を通して -

英語科研究会議

土屋 雅徳<sup>1</sup>

新妻 幸子<sup>2</sup>

平谷 泰美<sup>3</sup>

村井恵美子<sup>4</sup>

## 要 約

「実践的コミュニケーション能力の育成」を目標とする中学校の英語学習において、知識を教え込むだけではなく、学習で得た知識を実際の場で生かす力の育成を目指し改善がなされてきた。しかし、現代社会の著しい変化や生徒の実態を見ると、従来の指導法で基礎・基本を支えながらも、より一層の英語運用能力の向上を目指し、学習過程の改善を考えていく必要性が出てきている。

そこで、本研究会議では現在行っている活動と指導の段階において、改善が必要であると考えられる Practice 活動に焦点を当て研究を進めることとした。Practice 活動は Input 活動で学習した表現を Output 活動で表出できるように道筋をつける練習段階である。この段階では、「Recycle」「Creativity」「Function」という要素をもった個々の生徒の英語運用能力に応じた表現活動が必要であると考えた。そこで、このような条件に合うスキット活動\*を Practice 活動に取り入れることでコミュニケーション能力が高まるだろうという仮説のもと、日頃の活動に織り交ぜて実施した。

スキット活動がコミュニケーション能力を育成する Practice 活動として有効かどうかを授業実践を通して検証した。その結果、年間指導計画や発展的な活動との関連などに課題は残るが、スキット活動は Practice 活動として有効な活動であることがわかった。また、生徒の変容について、面接調査やアンケート、生徒の作品などを検討資料として考察したところ、コミュニケーション能力が高まったことがほぼ認められた。\*生徒の創造性や活動時間などを軸に分類したいいくつかのスキットを言う。

キーワード：英語科指導法，コミュニケーション能力，スキット活動，Practice 活動

## 目 次

はじめに

主題設定の理由	134	4 .Practice 活動としてのスキット活動	137
1 .中学校の英語教育の現状	134	5 授業実践を通じた活動の評価	142
2 .研究推進の要点	134	6 生徒の変容	144
研究の内容	135	研究のまとめ	147
1 .研究の仮説	135	1 研究から見てきたこと	147
2 .本研究で扱うコミュニケーション能力		2 今後の課題	148
について	135	参考文献	148
3 .英語学習における問題点の明確化	135	指導助言者	148

<sup>1</sup>川崎市立今井中学校教諭（長期研修員）

<sup>2</sup>川崎市立富士見中学校教諭（研修員）

<sup>3</sup>川崎市立犬蔵中学校教諭（研修員）

<sup>4</sup>川崎市立向丘中学校教諭（研修員）

## はじめに

国際化・情報化が急速に進み、様々な情報媒体の発達により、世界中の情報を簡単に得ることができるようになった。それに伴い、英語に触れる機会は急速に増えてきた。また、人間関係の希薄さが取り上げられる昨今、よりよく生きていくために、お互いの立場や考えを尊重しながら言葉によって伝え合うコミュニケーション能力は、社会や人と人との関係を保つために大変重要である。

外国語（英語）科の新学習指導要領でも、国際化の進展に対応し、実践的なコミュニケーション能力の育成をより一層重視し、英語の学習を通して、視野を広げ異文化を理解し尊重する態度の育成を図ることが重要であるとされている。

## 主題設定の理由

### 1. 中学校の英語教育の現状

以前に比べると、文法中心の授業や教科書だけを教材とする授業ばかりではなく、ゲーム的な活動や課題解決学習などの疑似体験的な活動も取り入れられるようになった。それに伴い、生徒が使う英語の量は増え、ALT との対話や生徒同士の対話でも、自信をもち積極的に英語を使おうとする意欲が強くなった。また、既習言語材料を統合的に使用する活動を取り入れ、英語運用能力も以前に比べると大きく向上したことが、過去の当センターの研究<sup>1)</sup>で報告されている。

その一方で、実際の場面に近い即興的な対話活動や場面を設定した活動では、お互いの考えを伝え合ったり、内容を深めたり、分からないときには聞き直すなどの日頃の基本的な練習で身に付けた表現や技能を活用することが十分にはできていないという問題も多い。学習指導要領の目標にあるような、学習した表現を自分の言葉として使いながら対話を継続していく力を身に付けているのかという疑問が残る現状である。そこで、これらの問題を解決し、既習事項を実際に使用できるようになるまでの学習過程で、段階を追った活動の設定について工夫する必要があると考えた。

### 2. 研究推進の要点

研究を進めるにあたり、前述の問題点を踏まえ、次のような研究の要点をあげた。

本研究で扱うコミュニケーション能力について

コミュニケーション能力と呼ばれるものは広範囲に及んでいる。そこで、新学習指導要領の目標から研究実践を通して本研究で扱うコミュニケーション能力を絞ることとした。

英語学習活動における問題の明確化

現在行われている英語の授業はどのような活動が指導過程の中心になっているのか、また学習指導要領の目標に迫る活動にはどのような要素が必要なのかを検討し、問題点を明らかにする。

コミュニケーション能力を育成する指導法と実践

明確にした学習活動における問題点を整理し、コミュニケーション能力を養うための指導過程を踏まえ、学習活動に有効な活動を設計し実践する。

授業実践を通じた活動の評価

授業実践を通して、その活動が Practice 活動として有効かを検証する。

生徒の変容の見取り（Pre-Test と Post-Test、生徒作品、アンケートから）

抽出生徒への諸調査を通して、生徒のコミュニケーション能力や意識の変容を見取る。

---

<sup>1)</sup>金子勉「自分の気持ちや考えを英語で表現する指導法の研究」平成 11 年度川崎市総合教育センター研究紀要 13 号 2000,p,82

## 研究の内容

### 1. 研究の仮説

コミュニケーション能力の育成に必要な学習活動の要素を明確にすれば、適切な学習活動を設定することができ、その活動を通してコミュニケーション能力が育成されると考え、以下のような研究の仮説を設定した。

コミュニケーション能力の育成に必要な学習活動の要素を明らかにし、その要素をもった活動を学習活動に取り入れることによって、コミュニケーション能力は育成されるだろう。

### 2. 本研究で扱うコミュニケーション能力について

新学習指導要領の目標にある「実践的コミュニケーション能力」とは、音声によるコミュニケーションを重視した、日常的な会話や簡単な情報の交換をするための、基礎的・実践的な能力を指している。つまり、学習した表現や技能を場面に合わせ、自分の言葉として使いながら情報の授受をする、特に「聞く」「話す」コミュニケーション能力の育成を目指しているのである。

実際のコミュニケーションの場を考えると、教科書にあるようなよどみのない円滑な対話が常に続くことは多くはないと考える。そこには、比喩的な表現や日本語とは対話のプロセスが違い戸惑う場面もある。さらに、対話の継続の障害となる未知の単語や表現、特定の条件で使われる慣用句などもある。このようなことは日本語の対話でも起こることであり、中学校から英語を学習する初級学習者が、このような場面に出会うことは多い。実際の場での活用を考えると、授業でも自分の考えや意見を伝える力と同時に、対話を継続できるような力の育成が大変重要になってくると考える。

そこで、本研究会議では、すでに定説になっている

4つの能力(Discourse, Strategic, Grammatical, Socio Linguistic)<sup>2)</sup>から以下のものを扱うこととした。

Discourse Competence < 談話能力 >

(一貫した話題で会話を展開、継続する力)

Strategic Competence < 方略的能力 >

(適切な語彙や構造を思い付かないとき、言い換えなどの方法で対話を続ける力)

Grammatical Competence < 文法能力 >

(伝達を有効に行うために適切な文の構造、表現形式を選択して使用する力。)

また、このような能力が育成され、達成感を重ねることによって、生徒のコミュニケーションに対する意欲や態度、英語運用能力も向上するだろうと考えた。

### 3. 英語学習における問題点の明確化

#### (1) 学習活動の段階について

本研究会議では「『単語や表現の導入』から即興的な活動での『表出』まで」という指導の流れをまとめ(図1)、日頃の活動と指導の段階との関係から、現在の英語学習の問題を探ってみた。

この図から、日頃の学習活動では単語の発音や綴りの練習、Information gap game などの基礎・基本的な活動と、タスク活動・ディスカッション・Chat Time などの発展的な活動との間に位置する活動が少ないということがわかる。つまり、現在の学習活動は破線の部分の機械的な練習(Input)から自由な表現活動(Output)へつなげるPractice活動が不十分であるという事である。

<sup>2)</sup> Canal & Swaine 'Theoretical bases of communicative approaches of second language teaching' p.32 1983

日頃の活動と指導段階

図 1

Inputされた1つの単語や表現が自由対話活動でOutputされるまで



\* 図中の活動例は本研究会議研修員の実践を例にとった。教員のInputの量は左から右に少なくなっていくことを斜線で示している。

Input 活動で得た文法的な知識や語彙を活用し、文章の内容を読み取ったり、訳したりする力は、大変重要なコミュニケーション能力の一部である。Practice 活動は、その Input 活動で学習した表現や語彙を自分の言葉として使うことができるように、一度学習したことを再度練習することが求められる学習段階である。そして、Practice 活動を通して表現、理解できるようになった言語材料を使い、Output 活動を通して、様々な課題を解決するような活動で、実際に活用する練習を通して定着させる。しかし、実際には Output 活動において思うような活動ができないことが多い。これは、一斉授業を通じた知識の注入から急に発展的な活動に移行しているからだと考える。そこで、その中間に位置する Practice 活動における指導法の改善に焦点を当て、研究を進めることとした。

(2) Practice活動に求められる要素

英語学習の目的の1つである即興的な対話活動のような Output 活動を支える Practice 活動において、どのような要素をもった活動を行えばいいのであろうか。

Input 活動で学習した表現や技能は、教科書の音読や内容理解、ワークシートを使った情報交換や場面を設定した活動などで繰り返し学習をしている。しかし、このような活動だけでは不十分であり、より効果的な練習を加える必要があると考える。高島英幸氏<sup>3)</sup>は、「学習者の知識は実際には積み重なっておらず、小さな知識の固まりが散在しているという印象であった。学習した項目ごとの筆記テストをすれば一応できるが、学習者が自分の考えを表現しようとする場合、どの知識をどのように用いたらよいか分からないようである。教員は、断片として散在している学習者の知識を学習者自身の力でまとめ上げる援助を行い、同時に学習者の言語体験の不足を補う役目を担っている。」と述べている。さらに、「文法説明で学習者に伝えられた抽象的な知識を、どのような活動を通して具体的に使えるようにするかが課題なのである。」とも述べている。このように、どの場面でどのようなことを、また、学習した表現の中からどのような表現を使って表すのかを判断し、相手に伝えるという目的を達成する活動が必要だということである。つまり、この Practice 活動の段階において、学習したことを実際に表出できるようになるまでの道筋をつける練習が重要であるということである。

さらに、実際のコミュニケーションの場で行われる対話では、個々がもつコミュニケーション能力で相手に必要なことを伝えたり、相手から必要な情報を引き出すということが繰り返し行われる。授

<sup>3)</sup> 高島英幸 『実践的コミュニケーション能力のための英語タスク活動と文法指導』大修館 2000年 p.iv

業においても個々の力に応じた表現活動を取り入れ、場面に合わせた表現を選択し、対話の流れを考えて、継続、深化させる練習を繰り返し行うことが必要である。また、文字には、理解を助ける機能や記憶を強化する機能があることを考えると、「聞く」「話す」力の育成には、4技能（「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」）のバランスを考えた活動が必要である。

このような観点から、Practice 活動としての個々の生徒の英語運用能力に応じた表現活動には、文字を使った練習も織り交ぜた、以下の3つの要素をもった活動の設定が必要であると考えた。

#### **伝達目的に必要な言語材料を、既習事項の中から選択して使用することを繰り返すこと (Recycle)**

言語習得の過程において、同じ表現を繰り返し扱うことが、言語材料の定着には重要であることは多く述べられている。しかし、ただ単に繰り返すだけではドリルの域を出ず、蓄えた知識の中からその場で必要なものを選び出す力を育成することはできない。既習事項を総合的に操作しながら運用する練習の中で、その表現を長く記憶にとどめるために、同じ表現を何度も繰り返す練習が必要である。

#### **生徒が創造する場面があること (Creativity)**

教員の指示により何度も繰り返す機械的な練習やゲーム的な活動の中で特定の表現のやりとりだけで目的を達成する活動より、自分の頭で考え選択して表現を使う活動の方が、印象が強く、定着率も高くなると考える。

#### **「言語の機能」に配慮すること (Function)**

学習した知識は、日本語と英語が1対1の関係で記憶されることが多い。しかし、場面に合わせた表現は常に1つではない。同じ内容を伝える場合にも様々な表現で用いられることを学習することは、実際の場面では大変に有効である。「言語の機能」に配慮した活動を通して、日本語に合わせて表現を選択するのではなく、内容 (context) に合わせて表現を選択する力が高まると考える。

### **4. Practice活動としてのスキット活動**

#### **(1)スキット活動の特徴**

前述の3つの要素をもった個々の生徒の英語運用能力に応じた表現活動にはどのようなものがあるのだろうか。現在も、活動の準備段階での学習も含め、ディベートやディスカッション、課題解決学習、スピーチなどが統合的な活動として多く活用されている。しかし、本研究会議では昨年度の当センター英語科研究会議でも扱ったスキット活動に焦点を当てることとした。

スキットは、基本的に対話になっている。生徒が対話をつくる過程では、実際のコミュニケーションの場で繰り返されるように、生徒が自分自身の判断で話の流れに従い表現を選択する練習を繰り返していることになる。また、発表することが前提なので、他の生徒の反応もあり、対話をつくって終えるだけの活動より意欲的に取り組むのではないかと考えられる。スキットをつくり、発表することで、文字を書き、音読することも同時に行うことになる。高橋一幸氏<sup>4)</sup>はスキット活動について、「生徒が対話を考えるオリジナルのスキットでは、自分の考えをどの表現形式を使って伝えるかということに加え、話の流れから次にどのようなことを話題にしたらいいのかということも同時に学習することができる。自分でつくるという過程で学習したものは、長期記憶に入り定着率も習得率も高くなる。さらに、スキットづくりの過程で、演技力のある生徒や文章をつくる力のある生徒それぞれが力を発揮し合い、学び合う場を提供することができる。発表を通してお互いに刺激を受ける。生徒がつくるスキットを通して、生徒個々のコミュニカティブニーズに答えることができる。」と述べている。このような特徴を生かし、スキット活動をアレンジし、Practice 活動として実施することとした。

<sup>4)</sup>高橋一幸 神奈川大学専任講師 (平成13年度 川崎市総合教育センター研究報告会 指導・講評)

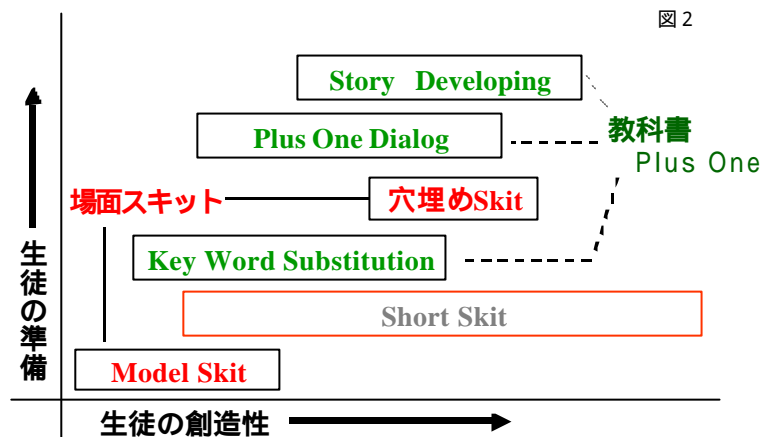
## (2)スキット活動の分類

スキット活動には、準備や発表に数時間必要なものやビデオを使ったものなど、様々なものがあるが、本研究会議では、先に述べた理由により Practice 活動に焦点を絞り、先述の3要素をもつスキット活動を中心の活動として研究を進めることとした。また、来年度からの授業時数を考え、教科書を使った活動や日頃のウォームアップ活動で活用できるもの、1時間で完結できるものなどを、生徒個々の英語運用能力で取り組むことができる表現活動として考案し、以下のような活動に分類した。

- ① Short Skit < Non-Scripted・Scripted >
- ②教科書 Plus One < KeyWordSubstitution・Plus OneDialog・Story Developing >
- ③場面スキット < Modelskit・穴埋め skit >

さらに、Real Name Skitの手法を全てのスキットで取り入れるようにした。これらは生徒の実態に合わせて繰り返し行われる必要がある。

また、スキット活動を、「生徒の創造性」と「生徒の準備時間」という観点から分類した(図2)。「生徒の創造性」は教員の指導と相対するもので、「生徒の準備」は、生徒がスキットづくりに費やす時間を意味する。生徒がつくる文章が少なくなるように設定すれば、生徒の創造性は低くなり、準備時間も短くなると判断して分類した。



## (3)本研究会議で扱うスキット活動のPractice活動としての有効性

先に述べたスキット活動は、どのような点で Practice 活動として有効なのかを「Recycle」「Creativity」「Function」の3つの要素との関連から考えてみた。

### Recycle

スキット活動で使用する表現や技能を生徒の理解の度合いに合わせ教員が指定することで、復習活動として同じ表現を繰り返し学習(Recycle)する場を与えることができる。同時に、教員側の活動の目標を設定しやすくなり、教科書での指導事項との関連を考えながら、計画的に既習表現を活用することができる。

### Creativity

生徒自身が場面を考えるような活動を設定することで、創造性(Creativity)が発揮できると考える。生徒が場面を考えるということは、その場面で起こる対話の内容を考え、組み立てながら、オリジナルの対話を構築していく作業を自然に行っていくことになる。その場面には、「空港で」「駅で」などの場面ではなく、人間関係や性格などの2次的な要素も含まれるようにも設定できる。場面を与えてしまうと、生徒がつくる対話は同じようなやり取りのものが多くなる傾向にある。

### Function

日本語と英語を1対1の関係で結ぶのではなく、対話の内容に合わせた表現を既習の語彙や表現の中から選択したり、指定された言語材料を基にしてスキットを考えることは、言語の機能について学習することになる。教員は言語材料を表現形式という分類ではなく、「相手を誘う」「断る」などの言語の機能の面でも分類して、既習事項の復習を設定することができる。

本研究のスキット活動は、知識の量や正確さだけを向上させる目的の学習ではない。知識を実際に活用できる能力の育成を目標にし、自分のもつ表現や技能を活用し対話をつくり発表する活動である。この活動では、対話をつくることが学習の目標であり、使用する表現が違っていても間違いということはない。対話をつくることで、同じ課題を解決したという評価を生徒に与えることができることもこの活動の特徴である。また、対話をつくる過程で、自分の意見や感想を述べたり、英語での対話の進め方なども学習することができる。さらに、ペアで活動することで効率よく活動させ、ウォームアップなどの短い時間でも有効に活用でき、1時間で完結するよう設計できることも有効な点である。

このように、これらのスキット活動は復習活動での活用を目的としており、創作スキットのように生徒が高い表現能力や創造性を発揮する活動やダイアログを暗記して発表するものではない。より高い基礎・基本の定着を目指し、生徒の主体性と意欲を引き出すような「Recycle」「Creativity」「Function」という要素をもった個々の英語運用能力に応じた表現活動であり、その中間に位置するものである。

先の4-(2)で述べたスキット活動は即興性に欠けるものである。しかし、学習者が即興的な対話の能力を身に付けるためには、初歩的な Practice 活動として時間をかけて対話をつくる練習も言語習得の過程では大切である。さらに、学習者の能力は同一ではないことを考えると、このような個々の学習者がもつ力で解決できるような活動を、従来の活動に織り込ませることも必要であると考えられる。このような練習を繰り返すことで、対話をつくる時間が徐々に短縮され、語彙も増え、実際のコミュニケーションの場でも役立つ力を使いながら身に付けられると考える。

#### (4)スキット活動について

##### Short Skit ( Non-Scripted ・ Scripted )

教員が Today's Phrase として表現を指定し、それを基に前後に文章をつくる活動である。指定する表現は、Speech Bubbles<sup>5)</sup>の表現や対話などでよく使われる表現、復習させたい表現などを使う。一問一答にならないよう、いくつかの選択肢のある表現を設定し、短時間で生徒の創造性を生かしながら復習できる活動として活用したい。例えば、Maybe some other time. を指定すれば、その前には相手を何かに誘うという行為が行われているはずである。つまり、Will you ---? / Shall we ---?などの「相手を誘う」表現を引き出すための表現として Today's Phrase を指定するのである。

・ Non-Scripted - Today's Phrase を使って5分程度で対話を考え、発表する活動である。ワークシートに書かず、その場で対話文をつくる。つくる対話文は4往復以上を目標にする。全体の活動時間は15分程度とし、なるべく多くの生徒に発表の機会を与える活動にする。近くの生徒と発表会を開くような時間も確保できるとよい。

・ Scripted - 「Non-Scripted」と同じように示された表現を基に対話をつくる活動である。Non-Scripted で使った phrase を使い、振り返り活動とすることもできる。5分くらいの間に相談しながら場面を考えてスキットをつくり、その対話をワークシートに書く。ワークシートに書くことで、教員が後で生徒の作品を確認することができる。練習時間を確保し、Read and Look up などの技法を用いてワークシートを見ないで発表させるよう配慮する。日頃の授業で Today's Phrase として使用した表現をいくつかあげる。

Sure, no problem. / How do you spell it? / I'm nervous. / What is ----- in English? / I get it.

What's wrong? / Oops, I made a mistake. / I have a headache. / Pardon me? / That's great!

May I? / It's my turn. / Watch out! / You, liar! / I need your help. / Guess the meaning.

<sup>5)</sup> 太田 洋 (東京学芸大学附属世田谷中学校教諭)「COLUMBUS 通信」1996年10月号 p.10

## 教科書 Plus One ( KeyWordSubstitution ・ Plus OneDialog ・ StoryDeveloping )

教科書を使うことで音読の練習になり ,教科書の内容理解もより深くなる。対話文のページを使い , 単語や文章などを生徒の考えや生活体験に基づいて一部変えたり加えたりすることで ,教科書の対話文が実際の使用場面に近づくと考える。この活動を継続することで ,教科書の読みに対して ,ただ単に内容理解する ,音読するという目的から ,1文加える部分を探したり ,単語のもつ意味に気を付けて音読をするというような ,より具体的な目的をもてるようになる。

・ Key Word Substitution - 教科書の文章から Key となる単語を生徒が選び ,別の単語と変える。単語を変えることで ,文章を変えなくてはならないような発展性もある。

・ Plus One Dialog - 教科書本文の内容を考えながら ,文中に最低 1文加える活動。慣れてくると ,数文加えたり ,文章を削除して ,新たに自作の文を加えるなどの活動も見られるようになる。

・ Story Developing - 教科書の対話の文章の内容を途中から変える活動。Key Word Substitution や Plus One Dialog では ,扱いにくいページもこの方法なら扱うことができる。3往復程度のその後の対話をつくることを規準として活動させる。

### 場面スキット ( ModelSkit ・ 穴埋め Skit )

教員が復習させたい表現などを入れた対話の文章を作り ,それを使ってスキットづくりをする活動。活動を通して ,生徒はその表現を何度も読んだり ,聞いたりすることとなる。また ,同じ表現がいろいろな場面で使われることで ,言語の機能についても学習できる。Model Skit と穴埋め Skit は1枚のワークシートの上下になっている。Read and Look up などの技法を使い ,なるべくワークシートから目を離して発表するような指導も必要である。

・ Model Skit - 教員がつくったスキットを使って ,場面を考えて読む。文章をつくる活動はないが ,生徒のオリジナリティーは ,Real Name Skit の技法を使うなどして感情を込めて発表するなど ,音声面で発揮させることができる。表現や文法のモデルとしての役割もあり ,Once again, please.などの限られた条件でしか使用されないが ,大切な表現も意図的に練習させることができる。

・ 穴埋め Skit - Model Skit の文章にブランクを設け ,そこに生徒が文章を入れ ,場面も考えてオリジナルのスキットをつくる。時間は多少かかるが ,その分生徒の発想が生かされる。ワークシートに書かせることで ,後で教員が確認したり ,生徒が振り返りの学習として利用することができる。検証授業で扱った Model Skit を例としてあげる。

A: (        ), where are you?

B: I'm in my room.

A: What are you doing? Come and help me.

B: Sorry, Dad. I'm watching TV.

A: Watching TV? Come on now!

B: OK. Dad. I'm coming.

\* 下線部は ,「穴埋めスキット」では ,生徒がつくる部分となる。

いずれの活動についても ,発表する機会を多く設定することが大切になる。発表することで ,発表者の技能向上と同時に ,聞き手の生徒には振り返り活動になる。また ,同じ条件であっても ,自分が考えもしなかった表現や場面を使うことができることを学習する機会にもなっている。

### (5)スキット活動の活用例

スキット活動を1時間の授業では ,Short-Skit を Warm-up として活用したり ,教科書 Plus One の活動を教科書の内容理解の Post-Reading の活動として活用することもできる。また ,新出事項導入後に ,確認練習の代わりに Short-Skit を使うことも可能であると考えられる。また ,場面スキットのプリントを授業の終わりに宿題として配り ,次時に発表会を開くという2時間での実施も考えられる。



さらに、長い期間ではどのような展開ができるかを表にしてみた。(表1) 中学校2年生の2学期を対象とし、スキット活動の種類や活動時間、言語材料は構成した。活動時間については、生徒が活動に慣れる時間も必要であり、当初は時間がかかると思われるが、徐々に短くなると考えられる。

・一定の期間での活動例(表1)

(教科書はTOTAL ENGLISH 2 学校図書)

回	予定	スキット活動	内 容	スキット活動の言語材料	授業内容
1	9/	ShortSkit(Non-Scripted)	Warm-up(過去形の復習)	I didn't watch TV yesterday.	Lesson5A Will you--? Shall I--?
2	9/	ShortSkit ( Scripted )	Warm-up (Nokidding の復習)	Nokidding!	Lesson5A
3	9/	.....	.....	.....	Task 活動
4	9/	ShortSkit(Non-Scripted)	本時まとめとして	May I use your pen?	Lesson5B May I--?
5	9/	場面スキット	Lesson5A,B のまとめとして	Will you help me, please?	スキット活動
6	9/	.....	.....	.....	Lesson5C have to--
7	9/	ShortSkit( Non-Scripted)	Warm-up(過去形の復習)	I studied English last night.	Lesson5C
8	9/	.....	.....	.....	Lesson5D have to-/don't have to..
9	9/	.....	.....	.....	Lesson5D
10	10/	ShortSkit( Non-Scripted )	Warm-up(Pardon me?の復習)	Pardon me?	課題解決「道案内」#2
11	10/	.....	.....	.....	Lesson5 の音読試験
12	10/	場面スキット	今までのまとめとして	I have to (must) go now.	スキット活動
13	10/	教科書 PlusOne Key Word Substitution	課のまとめとして		Lesson5A-D
14	10/	ShortSkit( Non-Scripted )	本時まとめとして	I'll become a-----.	Lesson6A become
15	10/	ShortSkit ( Scripted )	Warm-up(過去形の復習)	Where were you at 8?	Lesson6A
16	10/	.....	.....	.....	Lesson6B I want to--.
17	10/	.....	.....	.....	Lesson6B
18	10/	.....	.....	.....	Lesson6C to 不定詞
19	10/	教科書 PlusOne Story Developing	Lesson6 のまとめとして	Lesson6C の本文を使って	Lesson6C
20	10/	ShortSkit(Non-Scripted)	Warm-up (Don't tell lie.の復習)	Don't tell lie.	Lesson6 のまとめ
21	10/	.....	.....	.....	Lesson6 の音読試験
22	10/	場面スキット	課のまとめとして		Lesson6A-C
23	10/	ShortSkit( Non-Scripted)	本時のまとめとして	You look tired.	Lesson7A You look tired.
24	11/	.....	.....	.....	Lesson7B I'm glad to--
25	11/	ShortSkit( Scripted )	Warm-up (Will you---?の復習)	Will you be free tonight?	Lesson7C I have something to--
26	11/	.....	.....	.....	課題解決 Travel Agency
27	11/	.....	.....	.....	Lesson7A-C
28	11/	ShortSkit (Non-Scripted)	Warm-up (No, thank you.の復習)	No, thank you.	Lesson8 Pre-Reading
29	11/	教科書 PlusOne PlusOne Dialog	Lesson8A+B のまとめ	Lesson8A+B の文章使用	Lesson8A+B

## 5.授業実践を通じた活動の評価

### (1)場面スキットの検証

- 1.実施日 平成13年10月18日(木)5校時
- 2.対象学年 2学年
- 3.ねらい
  - ・Model Skit から穴埋め Skit へと段階を踏んでスキット活動に取り組みさせることで、よりスムーズにスキットづくりができるようにする。
  - ・スキットをつくらせることで、既習事項の定着を図る。
- 4.学習過程

活動内容	生徒の活動
・Useful Expressions の活動で今日の活動の新出表現を練習する。 A:Dinnerisready! (ごはんですよ - ! ) B:I'mcoming. (今いきまーす。)	・教員の言う日本語を英語で何と言うかを考える。 ・ペアで雰囲気を出して練習し、発表する。
・ModelSkit を提示し、活動の仕方を説明する。 ・数ペア発表する。 ・穴埋め Skit の説明をする。  - ワークシート - A: (            ), whereareyou? B:I'minmyroom. A: What areyoudoing? Comeandhelpme. B:Sorry,Dad. I'mwatchingTV. A: WatchingTV? Come onnow! B:OK. I'mcoming. ・発表	・親子関係を考えてペアで練習する。 ・指名されたペアはその場で発表する。 ・ペアで相談してブランクを埋め、スキットを完成する。早くできたペアはその続きを考える。  ・分からない単語などは、教科書で調べたり、先生に質問する。  ・なるべく覚えて、発表する。

### 5.考察

- ・初めて取り組んだ活動であったが、大変よく取り組んでいた。
- ・暗記をする時間がなかった。活動量と活動内容のバランスを考える必要がある。
- ・穴埋めスキットでは、話の流れが限定され難しいと思っていたが、よくアレンジしていた。
- ・活動としては表現を指定できるので、目的をもって取り組ませることができる。
- ・生徒の質問が多く、細かい支援も必要なのでチームティーチングの方がやりやすい。
- ・感情移入して発表するペアが多く、お互いに争い合うような雰囲気ですキットをつくっていた。
- ・同じ教材を使っても、学年が違うとまた違う発表を期待できるのではないか。

### (2)教科書 Plus One(Plus One Dialog) の検証

- 1.実施日 平成13年12月11日(火) 5校時
- 2.対象学年 2学年
- 3.ねらい
  - ・PlusOneDialog の活動を行うことで、内容理解を深める。
  - ・Plus One Dialog の活動を行うことで、会話を展開、継続する力と自分の意見を付け加える。
  - ・プリントを用意したことで、生徒の活動にどのような変化があったかを見取る。

#### 4. 学習過程

活 動 内 容	生 徒 の 活 動
<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科書の音読 ReadandLookup. (教員の後について・ペアで音読する)</li> <li>・Plus One Dialog の説明</li>   <li>・発表</li> <li>・まとめ 聞いた発表をもとに、さらに文章を追加する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員の後について、Read andLookup で本文の音読をする。</li> <li>・ペアで ReadandLookup しながら音読練習する。</li> <li>・説明を聞き、ペアで活動する。 2人組 = カロクと獵師 3人組 = カロク、獵師、ナレーター</li> <li>・文章をつ繰り終えたら、ワークシートを見ないで発表できるよう練習する。</li> <li>・希望する人から発表する。</li> <li>・どのような表現が使われているか、注意して聞く。</li> <li>・他のグループの発表を参考にして、どのような文章を付け加えることができるのかをもう一度考える。</li> </ul>

#### 5. 考察

- ・教科書の内容については、馴染みのある物語なので、ほとんどの生徒が理解できていた。
- ・何度も読み返し、文章を追加できる場所を探していた。しかし、この活動は発展性がないと思う。
- ・教科書があるので、安心して生徒は取り組むことができたようだ。
- ・出てきた表現は同じようなものであったが、個々の生徒はよく考え、積極的な態度であった。
- ・Plus One はできていた。最後には5つぐらい文章をプラスしている生徒もいた。
- ・文章の流れを読み取り、文章を付け加える活動として、効果があったと思う。
- ・プリントを用意したため、生徒は活動に取り組みやすかったようだ。

#### (3)生徒がつくったスキットから

スキット活動が Practice 活動として有効であるかを、日頃の授業実践で生徒がつくったスキットを資料とし、「Recycle」「Creativity」「Function」の面から分析した。それぞれの要素については、以下のような条件が設定されていることが必要であると考えた。

- ・「Creativity」 - より多くの場面を考えられるように設定されている。
- ・「Function」 - 指定された表現や条件、対話の内容 (context) を基に、複数の表現が使用できるように条件設定されている。
- ・「Recycle」 - 既習事項を使用しなければならないように設定されている。

Short Skit (Scripted) で生徒が考えた場面 (下線は Today's Phrase) を以下にあげる。

Thank you./Thankyouverymuch.

溺れているところを助ける。ものを借りる。  
時間を尋ねる。ここはどこか尋ねる。  
喉が乾いているので飲み物を願う。  
テニスと一緒にやってもらえるか頼む。  
「本を忘れていますよ」と教える。  
窓を開けてくださいと頼む。(等 15 場面)

I made a mistake.

歌詞を間違えた。曜日を間違えた。人違いをした。  
部屋を間違えた。答えを間違えた。  
Spell を間違えた。ケーキ作りに失敗した。  
ポテトチップを作るのに塩と砂糖を間違えた。  
休日に学校に行こうとした。テストで間違えた。  
もつてくる教科書を間違えた。(等 14 場面)

次に、Maybe some other time.を Today's Phrase として実施した Short Skit(Scripted)での例である。この表現は、生徒が相手を「誘う」「提案」する表現を使うことを予想して提示された Phrase である。それに対して、生徒が使用した表現は、32名中 Let's ---?(14名)/ Shall we ---?(11名)/ Will you ---?(2)であった。これらの表現を使い「買い物に行く」「食事をする」「テニスをする」などの、

相手を誘う場面設定をしている生徒が多かった。その他の表現として以下のような対話を生徒がつくっている。これらは、他の生徒と同じように相手を誘う場面を設定しているが、他の生徒とは違うプロセスを通して相手を誘う対話をつくったと言える。 (生徒作品 <原文のまま>)

A: Doyouwanttoplaygamewithme? B: Oh, I'm sorry. I don't. A: Why? B: I'm busynow. Maybe some other time.	A: Take me totheamusementpark. B: It looks like rain. Maybe some other time.
	A: Please teach memath,Dad. B: Oh, I'msorry. I can't teach it today. Maybe some other time.

同様に、I haven't decided yet.を Today's Phrase とし、未来形の復習を目標として Short Skit ( Scripted ) を設定した。生徒が使った表現は、32名中、Will you ---? ( 18名 ) / Are you going to ---? ( 3名 ) であった。その他の対話としては以下のようなものがあった。 (生徒作品 <原文のまま>)

A: I'm hungry. Let's gotoarestaurant. B: OK. Whatdo youeat? A: I want to eat a bigcake! And you? B: I haven't decideyet.	A:MayIhelpyou? B:・・・ ( gointo a restairant ) A:MayIhaveyourorder? B: No. I haven't decided ityet.
A: Apple pie and chocolate pie. Which piedo you make? B: I haven't decidedyet. A: I loveapple pie. I wantto eat one. B: Okay. I make applepies.	

教科書 Plus One(Plus One Dialog)では、次のような付け加えを生徒たちは行っている(教科書は TOTALENGLISH2 Lesson8「鶴の恩返し」p.64 学校図書 )

### 8 A 可愛いそうな鶴

*One day, Karoku finds a crane in a trap.*

Karoku: Don't worry. I'll help you.

*A strange man cries out suddenly.*

Man: What're you doing? That's my trap!

Karoku: Please release this poor bird.

Man: Poor bird? What poor bird?

This is my job. I catch cranes.

Karoku: Well, then, please sell this crane to me.

*The man takes Karoku's money and goes away.*

*Karoku releases the crane and it flies away.*

Are you OK? / What's wrong? / Are you in a trap?  
I don't catch you.

Wait, please. / Just a moment. / Hold on. /

I'm Karoku. Nice to meet you.

Don't touch! / No kidding! / Are you a thief?

Give it to me. / Who are you? / Don't touch it!

No kidding!

It's mine. / This is mine. / This is my crane.

Karoku: How much is it?

Man: Let me see.... 2000 yen.

Karoku: How expensive!

(別の生徒)

Man: How much do you have?

Karoku: Oh, I forgot money! Wait, please!

## 6. 生徒の変容

スキット活動を通して、実際には生徒のどのようなコミュニケーション能力が育成されたのかを、本研究で扱うコミュニケーション能力と照らし合わせて調査してみた。また、生徒はスキット活動を通してどのような点が育成されたと感じているのかを、生徒へのアンケートで調査した。ただし、この調査については、それぞれの研修員の日頃の授業の進め方やスキット活動の実施頻度の違い、さらにはそれ以外の要因も加味されるので、完全な同一条件下での調査ではない。

**(1)Pre-Test とPost-Testの結果から**

抽出生徒30名(各校10名)に、面接調査と作文調査を6月と1月に行った。

・面接調査の結果

項目	Pre-Test	Post-Test
1. 意見や感想などの付け加え(合計)	3	48
2. 相手に対する聞き返しの質問(合計)	(9)	1(20)
3. お互いに質問する<教員への質問>(合計)	(5)	8(17)
4. 分からないときの聞き返しや質問(合計)	13	19
5. 対話が途絶えた回数(合計)	104	48

・作文調査の結果

項目	Pre-Test	Post-Test
1. 文章数(合計)	117	138
2. 単語数(合計)	560	765
3. 教科書外の単語数(合計)	5	1
4. 文法の誤り(合計)	(23)	(10)

\* ( )で示したものは基準が不明確なもの。

面接調査は3分間で、事前にある程度の質問事項を知らせ、教員と生徒の1対1の面接試験の形態で行った。教員に積極的に質問するようなアドバイスも事前に与えた。作文調査については、プリントに記載されたテーマから1つ選び、5分間でそれについて作文するという形式で行った。

**(2)アンケートの結果から**

スキット活動を継続して行った生徒(2年生225名)にアンケートを行った。このアンケートでは、本研究で扱うコミュニケーション能力について、スキット活動を行う前後を比較して、自分自身の変化について生徒はどのように感じているかを調査した。(以下は調査結果の抜粋)

	とてもついた (とても楽しい)	まあまあついた (まあまあ楽しい)	あまりついていない (あまり楽しくない)	ついていない (楽しくない)
スキット活動は楽しい	22.6%	52.2%	13.1%	12%
話す力が付いた	14.2%	42.2%	30.2%	13.3%
聞く力が付いた	6.3%	57.4%	30.8%	5.3%
教科書の内容を理解する力が付いた	11.1%	53.3%	26.6%	8.8%
英文を書く力が付いた	10.6%	45.7%	32%	11.5%
音読する力が付いた	12.8%	55.1%	20%	12%
説明や感想を付け加えられる力が付いた	13.3%	42.2%	35.1%	9.3%
分からないとき聞き返しや確認する力が付いた	24%	43.1%	23.5%	9.3%
自分からも質問する力が付いた	14.2%	35.1%	39.5%	11.1%
関連のある話題で対話を続ける力が付いた	19.1%	51%	26.5%	3%

また、「普段の授業に影響したこと」「スキット活動を通して得たこと」「スキット活動に対する感想」には、以下のような記述があった。(原文のまま)

- ・楽しく英語を学ぶことができるから、長い間、スキットでやったことを覚えていられる。
- ・自分で考え創造する・・・これは英語力だけではなく豊かな考えや、色々な対応が出来ると思いました。
- ・色々な表現などが分かり、とてもいいと思います。自分達で文章をつくったりするので、力が付いてきました。
- ・教科書を読む時、気持ちを入れて読むことができた。
- ・最初はこの活動があまり好きではなかったのですが、実際やってみてスキット活動で得られるものがたくさんあることを知って少しのしくなりました。
- ・友達と普段しゃべっているときにふざけながらもたまに使っている。
- ・普段、使える何気ない英語を覚えることができた。表現が豊かになった。(gesture など...)
- ・友達といろいろこうしたり、そうしたりと、考えてこの人はこういう人なんだと人の個性がわかって楽しい。

### (3)抽出生徒の作品から

抽出生徒作品 ( Short Skit - Non-Scripted ) を時期を分けビデオに撮り、使用された表現を分析した。

平成 13 年 7 月

Today's Phrase: **Will you ~?**

A: Will you play tennis?

B: Yes, I will.

A: Will you enjoy next Monday?

B: Yes, I will.

A: Why?

\*1=will の欠落

B: Because I will play volleyball.

平成 13 年 12 月

Today's Phrase: **Merry Christmas.**

A: Hello.

B: Hello.

\*2=既習事項の再出

A: Merry Christmas.

\*3=have a の欠落

B: Merry Christmas.

\*4=at my house の誤り

A: Present for you.

B: Thank you. Me, too. Present for you.

A: Thank you. \*2 Shall we \*3 Christmas party  
\*4 my home?

B: OK. Let's go.

A: Let's go.

平成 14 年 1 月

Today's Phrase: **You'll get sick. / I'll get sick.**

A: \*5 What eat?

B: I eat potato.

\*5=What do you eat? の誤り

A: Do you like potato?

B: Yes. \*6 I eat potato everyday.

A: Really?

B: Really.

\*6=意見の付け加え

A: You'll get sick.

\*7=相手への忠告

B: Really?

A: Yes. \*7 Eat salad and milk.

B: OK. \*8 I get it.

\*8=既習事項の再出

平成 14 年 2 月

Today's Phrase: Who (Which) を使った比較級 (-er / more) の文

A: Which is more interesting, 観覧車 or ジェットコースター?

B: I think 観覧車 is more interesting than ジェットコースター.

C: Really? I think ジェットコースター is more interesting than 観覧車.

A: I think so.

\*9=get on の誤り

C: Let's \*9 go to ジェットコースター.

B: Stop! I don't like ジェットコースター.

<考察>

平成 13 年 7 月の段階では、生徒 A の最初の質問と 2 回目の A の質問には対話としての関連がなく、教員に与えられた Today's Phrase を使った一問一答の対話をつくることでほぼ終わっている。最後に Why? - Because- を加え、対話を深め、継続するよう努力している。

平成 13 年 12 月の段階では、前回に比べると対話数が増えている。さらに、スキット活動で学習した表現が再出するようになってきている (\*2)。文法的な誤りはあるものの、対話の内容が深まっており、前回のようない問一答ではなくなっている。発表でのやりとりも相手の顔を見て行うようになってきた。

平成 14 年 1 月の段階では、対話数は変わらないものの、質問に対する答えばかりではなく、意見の付け加えや相手への忠告のような内容の文章も使われるようになってきている。発表では、自然な身振り手振りも出てくるようになってきた。

平成 14 年 2 月の段階では、対話数は減り、対話の内容に深まりが見られなかった。I think --- で始まる文章を使い、自分の意見を述べる展開になっている。今後、場を設定して、練習時間を確保できれば、簡単なディスカッションを行うことができるのではないかと考える。

## 研究のまとめ

### 1. 研究から見てきたこと

#### (1) 英語学習活動における問題点

学習過程には、大きく Input - Practice - Output という段階があるが、日頃の授業実践を省みると、本研究会議で定義した Practice の段階の活動が不十分であった。そのため、Input から即興的な対話活動へ急に移行することになり、思うような活動を展開できないことが多いことがわかった。また、教員による Input 活動から生徒による創造的な活動に至までの関連が十分でないこともわかった。

#### (2) Practice 活動に求められる要素

Practice 活動における練習は、機械的な練習に加え、既習表現を自分の言葉として使い、対話を深化、継続させるように道筋を付けるような、「Recycle」「Creativity」「Function」という要素をもつ個々の生徒の英語運用能力に応じた表現活動が必要であることがわかった。生徒一人一人の能力は同一ではなく、蓄積されている知識や技能には違いがある。生徒の関心や意欲の育成の重要性を考えれば、基礎・基本となる表現や技能を習得する活動と併行して、どのような生徒にも取り組むことができる活動の設定が重要であることが、検証授業での生徒の様子などからもわかった。

#### (3) スキット活動

スキット活動が Practice 活動として有効であるかを、授業実践や生徒の作品などを通して検証した。その結果、スキット活動は Practice 活動として有効な活動であることがわかった。

「Creativity」の要素が生かされていたことは、Short Skit で与えられた Today's Phrase に対して生徒が大変多くの場面を考え、対話をつくっていることからわかる。「Function」については、Maybe some other time. が Today's Phrase の実践例の場合、生徒は与えられた表現から「誘う」「提案する」という場面を考え、Shall we ---? や Let's ---. という表現を使い対話をつくっている。さらに話の流れから「誘いを断る」文章を考え、I'm sorry. などの「謝罪」の表現も使っているところからも十分に生かされていることが分かる。「Recycle」については、教員側でほぼ意図的に既習事項を指定できるので、十分に生かされていたと考えられるが、具体的には、I haven't decided yet. を Today's Phrase として未来形の復習として実施した結果、多くの生徒が教員の意図する表現を使っていたことからわかる。

スキット活動が短時間で完結できる活動であるため、従来の授業に組み込みやすかった。数多く実施することで、生徒が活動自体にも慣れ、創造的な表現活動の場を多く体験できるようになった。また、生徒同士が学び合える発表の時間も多く設定でき、生徒の英語力の把握がしやすくなった。

#### (4) 生徒の変容

今回の面接調査やアンケート調査などから、正確とは言えないが、スキット活動に取り組む前と後では、次のような生徒の変容があったと考えられる。面接調査では「対話が途絶えた回数」は減少し、「意見や感想の付け加え」はある程度の伸びを見ることができる。しかし、即興的な対応を必要とする一連の対話の中での「教員への質問」や、質問されたことを「相手に聞き返す質問」の回数にも伸びが見られない。作文調査では、文章数の変化はほとんどないが単語数が増加している。生徒作品からは、次第に対話数が増え内容が複雑化してきていることがわかる。また、身体表現も加わるようになっている。このようなことから、生徒が使用できる表現は増加し対話中に簡単な意見や感想の付け加えができるようになり、場面に合わせた表現をより正しく選択できるようになったと考える。また、アンケートの記述から、生徒の興味・関心が高まり、積極的な態度が育成されたと言える。しかし、今回の研究を通して、即興的な対応についての学習は十分にできていないと考えられる。

## 2. 今後の課題

### (1) 年間指導計画との関連

来年度からの英語の授業時間数を考えると、準備や発表に時間がかかる活動を継続的に行うのは難しい状況である。短時間で、さらに1時間で完結できるという特徴を生かし、復習としてより効果をあげるためにも、単発的な活動ではなく、教科書の言語材料とスキット活動を結び付け、より有効に活用できるようスキット活動を年間計画の中に織り込むことが課題であると考えられる。

### (2) 発展的な活動との関連

スキット活動で身に付けたコミュニケーション能力は、Chat Time などの即興的な活動を行うことでより一層高まると考えられる。また、課題解決学習のような活動とスキット活動を組み合わせた活動も有効であると考えられる。Chat Time などの対話活動だけでは、何か物事を達成したという実感がないことも多い。正しく道案内をすることができたり条件にあった買い物ができたりなどの、課題解決学習という疑似体験ならではの達成感、生徒の意欲の向上や態度の育成に必要であろう。

### (3) 少人数制とスキット活動

生徒同士でスキットをつくる時、生徒からの質問も多く、教員によるチェックも必要である。これは、1学級に入る教員の数が多ければこれには対応しやすい。しかし、生徒がお互いの発表を見ることによる影響や振り返り活動の有効性を考えると、チームティーチングよりも学級を分割した少人数制の方がスキット活動の有効性を生かすことができるのではないかと考えられる。マンネリ化しないために、時には合同の発表会を開くことも一案として考えられる。

### (4) 目標に準拠した評価とことばの機能面

目標に準拠した評価の導入に伴い、従来の文の構造や文法の知識の量や文法の正確さを基にした結果を量る評価ばかりではなく、スキットづくりから発表までの過程やその内容から、関心・意欲や態度、そして技能について評価することも必要となる。スキットをつくり発表する過程は、個々の生徒の言語運用能力に応じた表現活動である。この活動においては、使用する表現が違っていても、スキットをつくり発表できたという点では同じ評価を与えることができる。その上で、学習指導要領に基づいてスキットの内容、発音、発表の様子などについて評価し、基礎・基本の重要性を確認しながら、よりコミュニケーション能力を高められるような手立てについて研究していく必要があると考えられる。

最後に、この研究を進めるにあたり、適切なお指導、ご助言をいただきました高橋一幸先生、金井友厚先生、太田洋先生をはじめ諸先生方、そしてこの研究を支援してくださいました研修員所属校の校長先生ならびに職員の皆様方に心よりお礼を申し上げます。

#### 【参考文献】

- |  |       |       |
|--|-------|-------|
| 松本 茂 編 『生徒を変えるコミュニケーション活動』               | 教育出版  | 1999年 |
| 平田和人 編 『中学校学習指導要領の展開 - 外国語(英語)科編』        | 明治図書  | 1999年 |
| 高島英幸 編 『実践的コミュニケーション能力のための英語のタスク活動と文法指導』 | 大修館   | 2000年 |
| 東後勝明 著 『なぜあなたは英語が話せないのか』                 | ちくま新書 | 2001年 |
| 樋口忠彦 高橋一幸 編著 『授業づ繰りのアイデア』                | 教育出版  | 2001年 |

#### 【指導助言者】

- |                                      |       |
|--------------------------------------|-------|
| 神奈川大学外国語学部専任講師                       | 高橋 一幸 |
| 大阪教育大学教育学部附属天王寺中学校教諭                 | 金井 友厚 |
| 東京学芸大学附属世田谷中学校教諭                     | 太田 洋  |
| 川崎市立白鳥中学校長(平成13年度川崎市立中学校教育研究会英語科部会長) | 石原由美子 |
| 川崎市教育委員会学校教育部指導主事                    | 鈴木 浩之 |
| 川崎市総合教育センター研修指導主事                    | 小池 優一 |